

生活綴り文集

登美南誌録

第五卷

目次

第一回 宿題

文集（縦書き）

七九二円

さんもん

三文の徳

「のびしろ」

楽しみ

わがまま

キミ

文集（横書き）

「志賀直哉」に、あやかって

幸ちゃんとの文通

初めての味

2周目の人生は。。。。

はらいながしきよめる

欲ばりな積読

真っ白

未知への扉

生活

水の底

ひとりだち

ベランダの主

ビフォーアフター

風蔵子（ふうぞうし）

みーちゃん

あさこ

西瓜が大好き

一休

高畑 尚也

グリーンティー

美味しい暮らし

のほほん

プリン大好き

This is me

タケノコ

奈良市 司郎都（シロウト）

行雲流水（こううんりゅうすい）

水紋

仲良し母娘

新井 忍

・
・
・

1

・
・
・

1

・
・
・

2

・
・
・

2

・
・
・

3

・
・
・

3

・
・
・

4

・
・
・

4

・
・
・

4

・
・
・

5

・
・
・

5

・
・
・

5

・
・
・

6

・
・
・

6

・
・
・

6

・
・
・

7

・
・
・

7

・
・
・

7

第二回 宿題

文集（縦書き）

驚きの楽しさ

あさこ

8

ジャンケンポン

風蔵子（ふうぞうし）

8

おかげさま

一休

8

小さな友達

みよちゃん

9

先見の明

青天の霹靂

9

悪癖

波紋

9

文集（横書き）

ようやく上がった「重い腰」

高畑 尚也

10

一日の始まり

マッピラゴメン

10

クロアゲハ蝶に会いたくて

グリーンティー

10

時を駆ける

和製プルースト

11

図書館の服

This is me

11

狛姫

下戸なんですけど

11

真夏のアラーム

のほほん

12

二泊三日

タケノコ

12

体想いの愉しみ

美味しい暮らし

13

「ハハハの歯」

プリン大好き

13

ドッペルゲンガー猫

五丁目のトラ吉

13

夢は元気なうちに海外へ

堺っ子

14

大地讃頌

新井 忍

14

編集後記

・
・
・

15

応募条件・編集方針

・
・
・

16

令和六年度 登美ヶ丘南公民館
主催講座 「くらしの文章教室」

第一回 宿題 二百文字文集

七九二円

ビフォーアフター

「読んだ本だけでもらってくれる？」

ちくま文庫の『傷を愛せるか』宮地尚子著は、ひと月ほど前に私の本になった。タイトルが少し気になったが、読みやすくて琴線に触れる部分が多い。やっと半分くらい読了。この本に出会う前と後では、何かが変わった。そんなかけがえない一冊。私も誰かにあげたくなった。本の帯には「弱いまま強くあるということ（中略）深く沁みとおるエッセイ」税込七九二円也。

三文の徳 さんもん

風蔵子（ふうぞうし）

九〇才を過ぎてからは起床を午前六時と決め、散歩に出かける習慣をつけた。近くに県立の森林公園があり、それを半周すると最低の運動量は確保できる。早朝は鳥の大合唱で、人の声めくものも混じる。意味は不明だが会話の様子が楽しく、思わず大声で唱和して家人に窘められたりする。地上では人様のワン公に超懐つかれ、遠くから一目散に駆け寄り鼻すりつけなどされるとたちまち頬弛む態。かくて小市民的な朝が始動するのである。

「のびしろ」

みーちゃん

八十才でバタフライが泳げたらカッコいいなと思い二年前に練習を初めた。

イルカ飛びが出来なくて、何度も止め様と思った。コーチのお陰で無理のない私に合ったフォームを教えて下さった。

少しづつ出来る様になった。

80才で何とか25m泳げた。

本人よりコーチが手をたたいて喜んで下さった。それを見て感激、本当に信じられない。

八十才でも、まだ伸び代がある事に気付いた。

もう少し楽しんで生きたいと思った。

楽しみ

あさこ

時の過ぎるのが早くなり、友も次々と旅立って行く。耳が聞こえて電話で話せる人も、残り少なくなった。

顔をあわせる機会があれば、逢えた喜び、話せる幸せに時のたつのも忘れ、「あら、もうこんな時間」と立ち上がり、「じゃあ、お元気でね、又逢いませよね」と別れる。これが最期かとは思いつつ。

それぞれの来し方も、気持もわかりつつ、たまのこうした時が持てるのは、私にとってとても貴重な楽しみの一つです。

わがまま

西瓜が大好き

人見知りの私は、毎朝5時過ぎに家を出て公園で、自彊術、ラジオ体操、ストレッチ、発声練習、鉄棒ぶら下がり、誰もいないのを良い事に好き放題して畑に寄って朝ごはんは8時過ぎ、子供園での絵本の読み聞かせや、50才代のメンバーの中で70才代は2人だけ、「やめんといてな」とお互い励まし合って3年続いているバレーストレッチ。音声館や北部会館へ歌いにも行く。楽しいが続く秘訣かな？どの顔を思い出しても心がホクホクする。

キミ

一休

いつもそばに居てくれた キミ

いつも迷いから前へ進めさせてくれた キミ

いつもおとなしくじっとみつめてくれた キミ

私はいつもあなたを見るたびに心が落ち着き、何かしらあなたは勇気を与え続けてくれました。

あなたはいつも私に何かを語ろうと、澄み切った瞳で見つめ

続けてくれました。

今まで私を守り続けてくれた キミ

私はあなたの肌のぬくもりを今も感じております。

私はあなたが先にいってしまったことを後悔しております。

「志賀直哉」に、あやかって

高畑 尚也

「謙作。——謙作」と下で母が呼んでいるのに気がついた。それは気味の悪い程優しい調子だった。——奈良・高畑に住み、この地をこよなく愛した文豪・志賀直哉の長編「暗夜行路」の冒頭の一節だ。

中学2年の夏休み、分らぬまま読み切った。私と文豪はそれでつながり、今も共通点がある。近所に住んでいるだけのことだが。

でも、文章の神様にあやかりたいので、ペンネームは「高畑 尚也（たかはた なおや）」とした。

幸ちゃんとの文通

グリーンティー

誕生日、今年も母からお祝いの葉書が届いた。母は86才。子ども達、孫達、親戚や友人に宛て、「おめでとう」の言葉と、生活にエールを送る一言に手描きイラストを添えた葉書を、長年送ってくれている。

その母が「自分の夢・目標は幸ちゃんとの文通なの」と言う。幸ちゃんとは2才9か月のひ孫である。私は大きな平仮名で綴られた手紙を想像し、この夢が叶うこと、そして二人の文通が長く続くことを心から願っている。

初めての味

美味しい暮らし

「お蕎麦を食べに行かない？」と友より連絡が来た。著名人もお忍びで訪れるという「玄」。一度は行ってみたいと思っていたので、二つ返事で返す。傘をさしつつ奈良町の路地を迷いながら進んで行くと、隠れ家のようにひっそりとした佇まいのお店が現れた。人気は水蕎麦だそう。「蕎麦つゆで食べないの？」と驚いた。お水、塩、梅を好みで付けて頂く。梅とお蕎麦は合うのだと初めて知った。外食すると自分のレパートリーを広げることになる。これは嬉しいおまけだといつも思う。

2周目の人生は。。。

のほほん

今年、私は還暦を迎えた。

十干十二支は60年で暦が1周廻る。

社会人、妻、母という3つの顔で、必死に駆け抜けていった若き日々。いつの間にか時は流れ、今ではもうあの頃のようにしゃかりきになる必要はない。ひとりで過ごす時間も増えた。

これから先は私ファーストで生きていってもいいよね。

「人生は思い出作り」と誰かが言っていた。

早速、カメラと書くことを習い始めた。

1周目とは異なる思い出作りを、さあ、はじめよう。

はらいながしきよめる

プリン大好き

「^{ちとせ}千歳の命延ぶと言うなり」。雨の降るなか、唱えながら玉砂利を踏みしめて歩を進める。この前に「水無月の夏越しの祓する人は」が付く。夏越しの祓の茅の輪くぐりで詠み上げる古歌だ。一年の半分を終える日に上半期の罪^{つみけがれ}穢を祓うため、ひとがたに息を吹きかけてそれを移し、水に流す。悪しきものを駆逐、撃退するのではなく、祓い、流し、送る。ここでないどこかにお移りいただくという、誠に日本的な考えに共鳴しつつ身を清めた。

欲ばりな積読

This is me

読みたい本を次々と買うのは、楽しみの1つだ。仕事があるのでゆっくり本の世界に浸る余裕はないが、書棚に並ぶ400冊以上の本のタイトルを眺めているとワクワクする。

「いま本当に読みたいものだけ残して処分したら？」と家族から言われる。旅行、運動、学習、映画と、退職後にしたいことは多い。睡眠や社会活動も必要らしい。生涯ですべてを読み切れるだろうか。

本には求めた時の時期や場所や思い出も伴う。ゆっくり速く読みたい。

真っ白

タケノコ

庭の切り株に、ポコッと真っ白いキノコが出た。
見る度に厚みを増し横にも太っていく。
木の養分を吸い取っているのだ。
切り株は残された生命をキノコに与え土に戻って行く。
はるか昔から同じような営みが続いているのだ。植物も人も同じだなあ。
おっと。私はまだ成長中。すくすくと伸びる姿を楽しみたい。

未知への扉

奈良市 司郎都(シロウト)

「あの人の名前なんだっけ。今、何言うたん」毎日繰り返される夫婦問答。また「えっ、俺今何しようとしたんだっけ」と戸惑うこともしばしば。年を経て「死」を意識し、逝くなら「ピンピンコロリ」やと毎朝のテレビ体操やウォーキングなどで体調管理に努めてきたが、認知症とは。巷間死後の世界については種々語られているが、認知症の世界は……。その扉を開くときまで、認知症予防への取り組みを強めている今日この頃である。

生活

行雲流水(こううんりゅうすい)

雨の日は決まって家族の運転手。
車中のオーディオから流れる「物価上昇、歴史的円安」庶民には厳しい日本経済トーク。
軽妙な語り口でそれとなくリクエスト曲へ誘導するラジオパーソナリティへ心の中で拍手、両手はハンドルキープ。
復路、メモを片手にスーパー到着。足が向かう先は雑然と置かれた見切りお宝コーナー。
バナナ4本60円。熟れたバナナは砂糖の代用にもってこいだ。アイスを作ろうか、それとも焼き菓子にしようか。

水の底

水紋

コポコポコポ、そんな息苦しさの中で目が覚めた。体がズーンとベッドに沈む。寝室のLEDの豆電球をつけてみる。薄緑の光がぼんやりと見える。水面に見えるまん丸い月のようだ。

パジャマの襟元がぐっしょりと濡れている。着替えなきゃと思い頭をあげたが、体が鉛のように重い。まるでここは深い沼の底だ。湿ったパジャマがまとわりついて気持ちが悪い。

私は6月が嫌いだ。替えのTシャツを取り出し、着替えるとふうとため息をついた。

ひとりだち

仲良し母娘

「もう俺の事に口を出さんといて!」初めて強い口調で彼は言った。

小学校の頃から教育熱心な夫。傍から見たら良い成績でも満足しなかった。

希望しない高校への入学だったが、夫に文句を言わせない成績を取り続けた。

今となっては自由に大学院で研究に勤しむ彼。

今となってはあの時に言った言葉を後悔する夫。

あの時があったから今の彼が居て、自分の教えが偏っていた事に気づく夫が居る。

これからどんな父子関係になるのだろうか。

ベランダの主

新井 忍

「おはようクーちゃん」。洗濯物を干すとき、アロエの鉢に水をやる時、挨拶は欠かせない。陽を受けて光るクモの巣は、昨日より少し広くなっているようだ。ベランダの主、ちっちゃいクモのクーちゃん。蚊やコバエの残骸が引っ掛かっていることも。頼もしい限りである。その美しい糸で小さな虫を絡めとってね。ペットではないがパートナー。雨風が強いとどうしているか心配になる。クモの巣の張りは私の心の張りといつしかなかった。

第二回 宿題 二百文字文集

驚きの楽しさ

あざこ

オリンピックと酷暑とお盆が重なり冷房漬けの日々。選手達の晴舞台に観えたこれ迄の日々や心底に縷々と積もる様々の想いを受容しつつ過ごした時間は、心の底から動かされた楽しい刻^{トキ}でした。

勝敗その色合いに变りはあっても共感の刻を楽しみました。

ウォーツと叫ぶ気持も泣崩れる気持にも同期していました。

楽しかった、終わっちゃった、

だけど残ってる、と云う気分も楽しんで過ごして居ります。

ジャンケンポン

風蔵子(ふうぞうし)

九三才まで生きるとは、思わなかった。まず身体機能がぐすと落ちる。眼、耳、歯の老化が酷い。トイレも近くなる。威張れるのは旺盛な食欲と、辛うじての朝の散歩ぐらい。

そんな中、近年、歌と書道にはまって来た。歌はオペラのアリア、書は公募展での入選を夢見る。人格形成最後のあがきの証として取組みたい。

寄る年波とのシーソーゲームだが、そこは神様との勝負の領域。ジャンケンポンでも挑んでみるとしようか。

おかげさま

一休

今まで「おかげさま」という言葉を何度かみしめてきております。

この歳まで大したことなく、時を重ねてこられたのは、まぎれもなく都度、素晴らしい人達とのめぐり逢いの積み重ねと思う日々である。

もう無理、と思ったとき、なぜか不思議と思いがけない人とのめぐり逢いの積み重ね。

これまでの人々のおかげで今を過ごしていますが、これで本当に良かったのか？ 助けていただいた人々に私は何かをすることができたのだろうか。

小さな友達

みよちゃん

えまちゃんは、我が家の向いに住む七才の女の子です。

彼女が四才の時引越してきた。

初めての挨拶で私を「みよちゃん」と呼んでと頼みました。

小さくウンとうなずいた彼女。

私の車のエンジン音が聞こえると必ず手を振って見送ってくれる。

三年経って、彼女に妹が出来た。

今は二人でバイバイしてくれる。

二人は私の最年少の友達です。

彼女達のえがおは私に元気をくれる。

いつまでミヨちゃんと呼んでくれるかなあ。

先見の明

青天の霹靂

「お米が買われへんねん」と知人が言う。どこへ行ってもお米の棚にお米がないとの事。

私は知り合いの農家から買っている。そろそろ新米が採れる頃かなと思い乍ら連絡してみた。

「今、米が全々ないんです。近所に聞いてもどこにもない。今年は暑かったので田植えが遅く稲刈りは十月中旬過ぎになると思います」

ふと糶保管している米を思う。夫と二人で作った最後の米を「米が買われへん時が来た時の為に」と夫が残して置いた米を。

悪癖

波紋

最近、極力本やマンガを読まないようにしている。私には本を読み出すと「寝ない」という癖があるからだ。どうしても続きが気になってしまい、眠いのに寝ずに読んでしまうのだ。自分なりに寝るための対策は練っている。推理小説は殺害シーンを読んでから解決の場面を読む「古畑任三郎」形式を勝手にとっている。なのに、やってしまった。期間付きで無料で読めるマンガに手を出してしまった。そして今日も眠れない夜になるのである。

ようやく上がった「重い腰」

高畑 尚也

この夏、南海トラフの地震臨時情報が出た。コロナ禍の5年、洋服ダンスに家具転倒防止の「突っ張り棒」を取り付けるのを放置していた。「よし、やるぞ」。

早速、近くのホームセンターに走ったが、すでに売り切れ。ようやく「防災フェア」をやっていたスーパーの会場で買い求めた。2本組みで1,680円。取り付けには15分もかからなかった。「これで、安心やね」と喜ぶ小5男児の孫。ようやく上がった「重い腰」。

一日の始まり

マッピラゴメン

東の空はあかねいろ。静寂な住宅地を抜け、池に出る。

山際は神々しい光に変わってきた。水面に映える。手を合わせる。水鳥が3羽、波紋を描いて泳いでくる。

池の畔のお地蔵様にご挨拶。農家の庭先に蓮の花が咲いている。

川沿いを歩き始めると可愛い花やカワウ・キジなどの姿も…

「おはようございます」散歩の人たちと出会い始めた。

ときのうつろい・四季折々の景色を楽しみながら今日も歩いている。

クロアゲハ蝶に会いたくて

グリーンティー

アゲハ蝶は蜜柑の木に産卵するんだって。

11年前の7月、実家の父が急逝した。その葬儀の出棺の時のこと。大きなクロアゲハが何処からか舞い来て、母の肩先と胸元に止まったり、囁くかのように母の周りをひらひら飛んだ後に木立に消えた。「この蝶はきっとお父ちゃんだ」

翌春私は蜜柑の苗木を2本買った。以来毎年夏の庭にクロアゲハの訪問がある。蝶の姿を見つけると私は庭に飛び出して、母と家族のことを蝶に話しかけるのだ。

時を駆ける

和製プルースト

今年は帰ろうと思った。新幹線を2路線とローカル線に乗り継ぎ、ようやく到着。盆帰りの混雑ときれいに舗装された、ただただ広い駅前の道路にたじろいだ。昭和の懐かしさを醸す大村崑さんのオロナミンCの看板は無くなり、外壁がトタンからモルタル塗装に変わりながらもしぶとくそこに在った小店は跡形もなく消えていた。

道すがら、地元民御用達の商店街へ。知る顔に出くわすことはなかったが、漂う方言に安堵と帰省の実感が湧いた。

図書館の服

This is me

図書館の通路脇の席にいた。横を通りすぎる人の派手な緑のズボンにドキッとした。「攻めた」服装だった。

見回すと、周囲の多彩な服装に驚く。なぜその帽子、眼鏡、靴、Tシャツ、ズボンを選んで図書館に来たのか。

男の人でも個性的な服装も増えたと、ピアスも増えた。

大衆化の時代から多様で個別化の時代が来たということか。そうではない。

自分が常に無難な服を選んでいただけで、周囲は着々と多彩な個性を発揮しているのだった。

狛姫

下戸なんですけど

会社員の夫は畑を借りて葡萄を育てワインを作ってもらっている。昨日は選別した葡萄を軸から外し、小さなタンクの中で手で潰す作業を行ってきた。夫は一粒ずつ外してから全量を体重をかけて潰していく。私は前回指が辛かった為、軸から外すと同時に潰していった。「このやり方の方が楽だ。次からはこうしよう」と夫。やった事のない事は面白い。だから葡萄作業にもつきあっていける。今年も無事に＜狛姫＞ワインができますように。

真夏のアラーム

のほほん

5:45、蝉の大合唱で目覚めた。

いつになく良く眠れていたのに。

誰かの指揮棒に合わせて、フォルテシモで始まったこれは「喜びの歌」か?! 一瞬で覚醒した。

7 月も末、全力で歌う君らも私も同じ今を生きている。5 階のベランダに出てメロディをハミングで口ずさんでみる。

薄ぼんやりとした水色を背景に生駒山がでんと見据えていた。え、マエストロはあなた?

背中に太陽がジリジリと照りつけていた。

さあて、今日もがんばるか〜。

二泊三日

タケノコ

孫と旅にでた。

海鮮をお腹いっぱい食べて、キタキツネを見たいという。

旅先は希望の札幌。

早速、早朝の市場を見学後にお目当ての丼を注文した。

マグロ、イクラ、カニ、ウニ、貝柱、サーモン、カレイの刺身が丼鉢から大いに溢れ出て盛りつけられている。

初めて見る豪華スター達の夢の共演だ。

口の中で溶けるウニ達。思わず二人で笑む。

行き先とルートは高校 2 年生の孫に頼りっぱなしだ。

二泊三日は頼もしい孫を再発見した旅であった。

体想いの愉しみ

美味しい暮らし

保存食作りで我が家は季節が巡っている。

8月、仕込んだお味噌の天地返しが終われば赤紫蘇ジュース作り。暗赤色の煮出し汁にお酢を入れたら、台所がたちまち実験室になる。子供達が小さかった頃は、ルビー色に変わる瞬間の歓声が楽しみだった。年々作るのは億劫になるが、出来上がれば元気の素。お腹を温めてくれる働きもあり、冷たい物を摂りすぎる夏にもってこいだ。

次は栗仕事。四季折々の作る愉しみが健康に繋がるのは嬉しい。

「ハハハの歯」

プリン大好き

口が開かない。顎が痛くて口腔外科を受診したら食いしばりという診断。矯正するなら上の歯を全て削り取らなければならない、膨大な時間とお金を要するらしい。お金が尽きる前に命が尽きる。唇は閉じて上下の歯が当たらないように意識するのが最善でお安い治療らしい。「普通」は常にその状態で、歯が上下で噛み合うのは一日17分だとか。

ほぐしてもらって開いた口が今度は塞がらないのは、請求が高額だからか。私が「普通」でないからか？

ドッペルゲンガー猫

五丁目のトラ吉

老さび猫のチャビは食が細く、残した食事はそのままにして翌朝に処分していた。しかし最近は器が空っぽになることが多く、食欲が増して安心していた。

ある日、カーテンの影が怪しく動いたので見ると、そこにはチャビが、いや違うチャビに瓜二つのさび猫がいた。目が合うと猫は外に逃げ出した。

そうか、完食は珍客の仕業だったのか。我が家に隠れて寝食を共にしていたとは。似すぎて気づかなかったのか。まんまと化かされたものだ。

夢は元気なうちに海外へ

堺っ子

今年で何回目だろうか。誕生日月にお祝いしあう友人がいる。

中学3年生の時に初めて出会ってから、結婚し子育てが落ち着いた今でも続いている。

歳を重ねるごとに欲しい物がその生活スタイルで変わる。自分のための物、家庭で使う物、子どもと楽しむ物。そして今は二人が楽しむ時間を過ごす。ここ数年の楽しみはいちご狩りと栗拾いへ。お互いの半年間の話を一気に喋るがあっという間に時間切れ。そろそろ旅行へ行く計画へ変更かな。

大地讃頌

新井 忍

合唱など授業で大昔にやったきり。この秋、ひょんなことから大合唱に紛れ込むことに。まず、楽譜のアルトパートの音符に色を塗る。主旋律とは違う地味なメロディーに四苦八苦。練習会までには音が取れるようにならないと。苦勞しつつ予習し練習に参加。全員おそろおそろスタートしたが、終わるころには「合唱」へと。四声のハーモニーの美しさたるや！
10月14日300人で平城宮跡朱雀門前にて高らかに母なる大地を讃えます。

◆編集後記

『登美南誌録』は、コロナ禍において再び私たちが活動を始めるきっかけとして、令和2年(2020年)12月に創刊されたのが始まりです。

新型コロナウイルス感染症(第1波)のため、奈良市の公民館はすべて4月10日～6月2日までの約2ヶ月もの間、臨時休館を余儀なくされました。登美ヶ丘南公民館では、その年の主催事業「学びの活動紹介展」の特別企画として「コロナ禍の私と公民館活動」をテーマに利用者や地域住民から原稿を募集して編集し『登美南誌録』が創刊されました。これらは当時の利用者と職員との何気ない会話の中から生まれたものでした。

また、この『登美南誌録』の作成にかかわった参加者さんの「文章をうまく書けるようになりたい」というお声があり、令和3年度からは当館の主催事業として「くらしの文章教室」を開催しています。フリーライターの新井忍さんのご指導のもと、文章を書くコツを学んでいます。宿題として受講者が書いた200字の原稿を編んで教材とし学習を深め、その後編集したものがこの『生活綴り文集 登美南誌録』です。講座はとても好評で、時間を増やして開催し、皆さんの原稿を編集しています。

かつての不自由な生活の中でも私たちはいくつかのルールを作り、生活様式の多様化を進めてまいりました。これらの困難は当たり前にある事柄の重要性を気付かせてくれました。また、私たちは今までとは違う未来へ思いを馳せる機会を得ることができました。この『登美南誌録』は困難の中でも、力強く生きていこうとする人たちの営みの結晶だと思います。

これらの文集には、作者が今まで培ってきた人生の中で感じた様々な思いなどが織り込まれています。個性豊かな表現にハッと気づかされたり、「なるほど」と納得させられたりもします。文章を書くことで、自分の中にあるあいまいだった思いなどが形作られます。また、それらの文章を読むことで、読み手の気持ちも彩り豊かなものになります。文章を通して人と人の気持ちの交流ができ、様々で新たな着眼点に触れることができます。自分たちのくらしや生活を見つめ直すきっかけとしていただき、「文章」の魅力を感じとっていただければ幸いです。

令和6年12月1日
登美ヶ丘南公民館
館長 阿部 祐歌

■講座内容＜全3回＞

テーマ

6月25日（火）【第1回】みなさまの受講目的や困りごとを整理してみる。

7月23日（火）【第2回】みんなの文章（宿題）を読んでもみる。

意見交換をする。

9月24日（火）【第3回】みんなの文章（宿題）を読んでもみる。

意見交換をする。

■文章の提出条件

- ・「くらしの文章教室」受講者を対象。
- ・二百字以内の作文でテーマは自由。 ※タイトル・ペンネームを含まない。
- ・原稿は手書き、FAX、パソコン、メール提出も可とした。
- ・第1回 令和6年7月13日（土）しめきり
- ・第2回 令和6年8月31日（土）しめきり

■編集方針

- ・明らかな誤字・脱字以外は、極力、提出された原稿通りに掲載した。
- ・縦書き、横書き、改行は文章の内容・印象に影響するので、提出された書字方向で掲載した。
- ・著者名は匿名・イニシャルとした。



生活綴り文集

登美南誌録 第五卷

編集・発行 登美ヶ丘南公民館

発行日 令和六年十二月一日

〒六三一〇〇一三

奈良県奈良市中山町西二丁目九二一

電話／FAX 〇七四二一四七一六三七五